

# 房総における管状土錘について

土屋治雄・高梨友子

## 目次

1. はじめに
2. 研究略史
3. 遺跡から出土する管状土錘について
4. 現代の土錘について
5. 考察
6. おわりに

### 1. はじめに

素焼きの管状土錘は、今まで多くの遺跡から出土している。大きさや形態の違いによるまとまりが認められるばかりでなく、時には釉薬のようなものがかかっているものもあり、比較的バラエティーに富んだ様相である。にもかかわらず、管状土錘は単に漁撈具（網の錘）と推定されているだけで、考古学的に考察の加えられることはあまりないようである。管状土錘は現代に至るまで使われていることが知られているので、そのため考古学的には扱われないということがあるのかもしれない。

今回、房総の管状土錘について、富津市内の魚網屋と元漁師の方に話を聞くことができた。その聞き書きを紹介しながら、遺跡で出土する管状土錘について若干考察してみたい。

### 2. 研究略史

縄文時代に比べ、弥生以降は農耕が経済基盤であるという一面的な考えから、漁撈は副次的なものとして、あまり取り沙汰されない傾向にあるようである。網の錘一般として、土器片錘や石錘など縄文時代の遺物とともに論じられる以外は、弥生時代以降に登場する土錘の研究はあまり行われていないようである。中には報告書の中で形状分類されているものもみられるが、だいたい報告書内のみで完結している。

県内の土錘について考察したものでは、以下の二つが代表的なものとして挙げられるだろう。

○野中徹 「弥生文化期から古墳文化期における漁撈活動－土錘を中心とした房総の漁撈－」（1984）<sup>11</sup>

- A類；土器片錘
- B類；球状土錘（土玉）
- C－Ⅰ類；管状土錘
- C－Ⅱ類；楕円状土錘
- C－Ⅲ類；円錐状土錘

土器片錘及び球状土錘・管状土錘を以上の5つに分類している。A類は縄文時代にみられるもので、弥生時代以降はB・C類が主力となる。C－Ⅰ類は弥生以降に出現、特に古墳期に多いもので、C－Ⅱ・Ⅲ類は古墳期に出現するという。B類には大型のものはないとのことである。

○岸本雅人 「土錘小考－房総半島における弥生時代以後の漁撈について－」（1984）<sup>21</sup>

- ①球状土錘
- ②管状土錘（長さが径を上回るタイプ）
- ③管状土錘（径が長さを上回るタイプ）
- ④楕円状土錘
- ⑤円錐状土錘
- ⑥有溝土錘
- ⑦工字状土錘
- ⑧棒状有孔土錘

球状土錘及び管状土錘を以上の8つに分類している。弥生時代以降は①から⑤が主体となり、⑦・⑧は、瀬戸内海沿岸の古墳時代に出土例が多く認められるものだという。

両者とも、はっきりとした結論は出ていないようである。強いていえば、内陸部では小さい球状土錘（土玉）が多く出土し、下流の海に近づくほど大きな管状

土錘が出土する傾向にあるという「事実」を抽出し、内陸部の波静かな湖沼における漁では小さな錘を用いた網を使い、波の荒い海では大きな錘が必要とされたのではないかと、この推定が結論になるようである。

但し、その推定にはあまり根拠はなく、「事実」抽出に至る各タイプのあり方も、明確ではない。これらの論文の出された後にも、多くの土錘が出土しているが、このような「事実」が本当に「事実」であるのか、疑問に思われる。

### 3. 遺跡から出土する土錘について

そこでここでは、房総半島で見られる管状土錘の形状分類を、新たに試みてみたい。また、球状土錘（土玉）についても、「使用痕がない」<sup>3)</sup>、「丁寧な面取りや赤彩のあるものもある」<sup>4)</sup>など、報告書中で魚網の錘とすることについて疑問を投げかけているものもあるが、ここでは野中分類・岸本分類に倣って、ひとまず1形態として加えてみたいと思う<sup>5)</sup>。

分類基準は、主に長さ・幅の具体的数値によった。本来的には、錘である以上重さを優先させるべきと思われるが、重さが報告されない例も多く、また長さ・幅・素材が同様であれば、重さも大差ないと思われる（第1図）。

- A類…長さ3.5cm前後、幅1.0cm前後、重さ2g前後。
- B類…長さ4.5cm前後、幅1.5cm前後、重さ8g前後。
- C類…長さ6.0cm前後、幅2.5cm前後、重さ30g前後。
- D類…長さ3.5cm前後、幅2.5cm前後、重さ20g前後。
- E類…長さ5～6cm前後、幅3.5cm前後、重さ60g前後。
- F類…長さ7cm前後、幅3.5cm前後、重さ70g前後。

- G類…長さ10cm前後、幅3.5cm前後、重さ150g前後。
- H類…長さ10cm前後以上、幅5cm前後以上、重さ200g前後以上。
- 球状土錘（土玉）…径3cm前後、重さ30g前後。

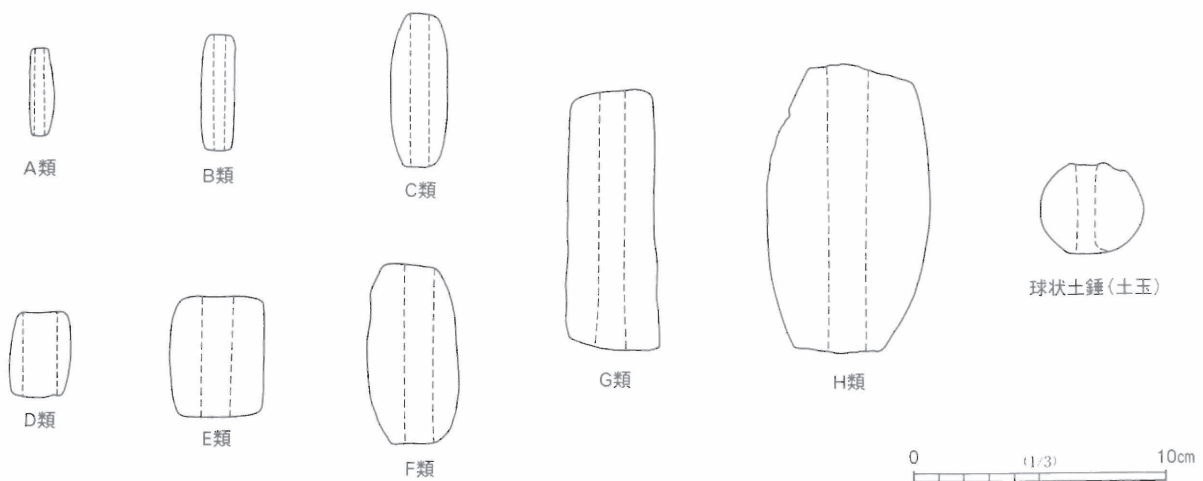
これらに野中分類・岸本分類を照らし合わせておくと、野中分類の「C-Ⅲ類」と岸本分類の「⑤」が「A類」に、野中分類の「B類」と岸本分類の「①」が「球状土錘（土玉）」に、野中分類の「C-I類」「C-II類」と岸本分類の「②」「③」「④」が、大きさにより「B類」～「H類」のどれかに相当することとなる。

次に、全9分類のそれぞれの分布状況を調べてみた（第2～4図）。

これらは、遺跡の調査歴や面積に大きく左右されていると思われるが、少なくとも「大きな土錘ほど海に近い下流域から出土する」という傾向はみられないことがわかる。それどころか、球状土錘（土玉）も各県の管状土錘も、県内においては明確に限定された分布域をもたないらしく、ほぼ全県的に出土しているように見える。

しかしながら、遺跡における出土土錘の割合を地域別に比較してみると、千葉・市原以北の地域では球状土錘（土玉）が主体的に出土し、県南地域では遺跡により特徴的な土錘の形状は異なるものの、球状土錘（土玉）より管状土錘のほうが主体的に出土しているという傾向を掴むことはできるだろう（第5図）。

なお、土錘の時期については、弥生・古墳時代の集落から出土していることが多いが、遺構に伴わないとされる場合が多く、ほとんど明らかにされていない。



第1図 土錘の形状分類

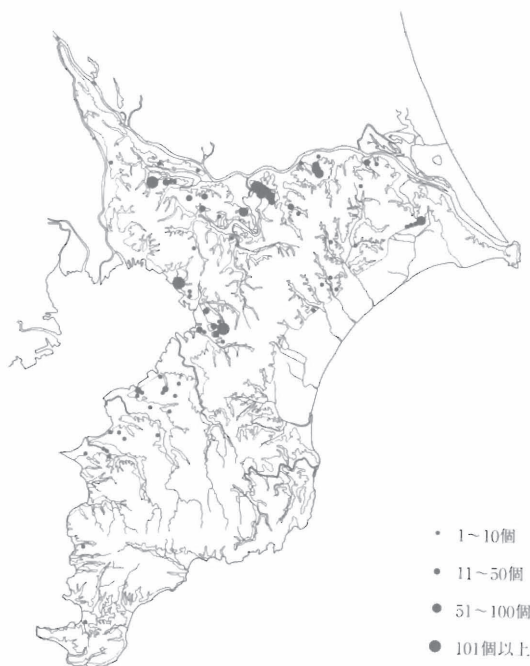


- 1~10個
- 11~50個
- 51~100個
- 101個以上

第2図 土錘の出土分布(1)



第3図 土錘の出土分布 (2)



第4図 球状土錘 (土玉) の出土分布

#### 4. 現代の土錘について

富津市金谷に住む竹之内忍氏は、昭和27年以来、自ら錘や魚網を製作して魚網屋を営んでいる。同所の元漁師、黒川春義氏の紹介を受け、店に赴き、錘を初めとするさまざまな種類の魚網具の実物を見せてもらいながら、二人に直接話を聞く機会を得た。

以下、両氏に聞いた話をまとめてみる。

##### (1) 網について

網は、網本体と錘 (イエボウ) と浮き (アバ) の3つでセットである。

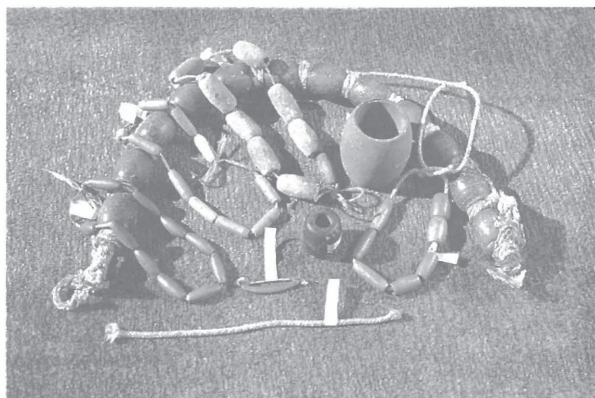
網本体；昔は綿や絹の糸を使っていたが、現在では化学繊維のものを使う。化学繊維のものは古くなるとゴワつくので、早めに取り替える。ほとんど使い捨てである。編み目の大きさは、獲物などにより1mm単位で異なる。

錘 (イエボウ)；現在では素材にいろいろなバラエティーがあるが、それぞれの長所を生かしながら使っている。大きさや重さ、形態は、獲物や漁法により厳密に異なっているので、逆にいえばこれで獲物を同定することができる。なお、孔の大きさは網の糸の太さに対応しているが、あまりこだわりはない。

但し、時期のわかるものをみても、土器型式のように時期によって形状が異なるという傾向は、ほとんど見出されない。

土錘のバラエティーは地域差でも時期差でもないと考えられる。それでは何に基づいているのだろうか。この疑問に対して、有効と思われる民俗例を得ることができたので、紹介したいと思う。

浮き（アバ）；錘と同様，獲物や漁法により大きさや形態が微妙に異なるため，これをみれば獲物が同定できる。昔は木などで作られていた。ツゲ（ノデ），ウルシがよく使われた。桐も使われたが，1時間ほどで水を吸って沈んでしまうのであまり良くない。今は腐らないプラスチックを主に使用しているが，それでもアバの形と大きさで獲物を同定できる。



現代の土錘のいろいろ



現代の浮きのいろいろ

## (2) 錘の素材について

素焼き；昔はほとんど素焼きだったが，今はキス用（一番小さな網）以外ほとんど使われていない。特性として，①陸で軽く，水中で重くなる（その分もきちんと計算されて，大きさが決められ，作られる）。②周りの水温にすぐなじむ。なお，釉薬をかけるとこれらの利点が失われてしまうので，わざわざかけることはない。

鉛；素焼きにとって代わった，現在の主流。金谷では昭和27年頃から作られ始めた。

陶器；地曳用の大きな網に使われている。

鉄；40トンクラスの特約船で使われている。鋳物はすり減らない。

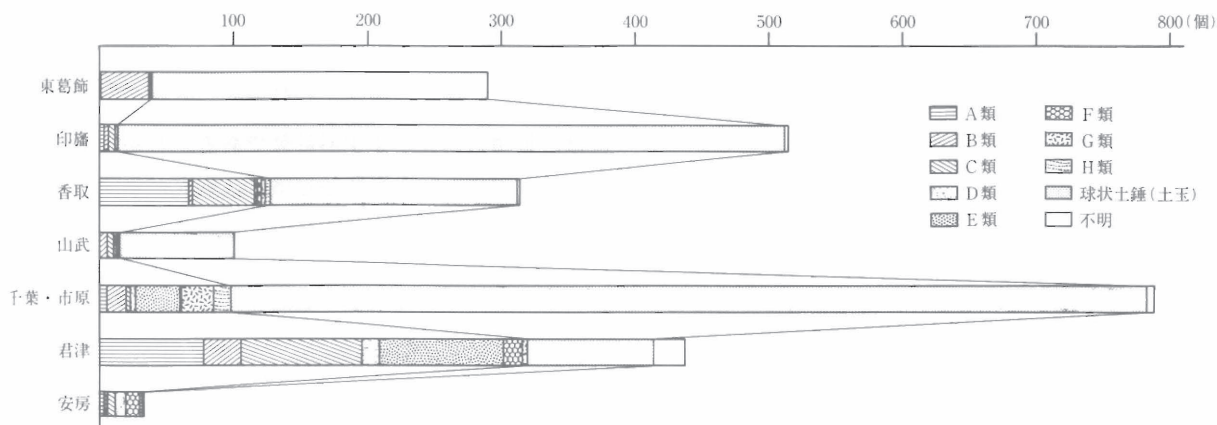
ゴム；鉄の粉を混ぜて作る。底曳網に使われている。

沈子コード；組紐の中に金属の極小の錘が入っているもの。キス漁には今はこれが多く使われる。ただし，1日で擦り切れてダメになる。

因みに石は，冷たくて水温になじみにくいので使われていないようである。

## (3) 土錘の製作について

「地焼き」の場合；良い粘土を採ってきて作る。粘土を槌で打って細かくし，水で練って，竹に油を塗っておいたものを芯にして握って形づくる。その後竹を抜き，乾かして，浜で流木などのゴミと一緒に焼



第5図 地域別・分類別 土錘出土量

く。その際カジメなどの海草類がゴミに混じっていたりすると、溶けて自然の釉薬のようになることがある。細いものでとてもきれいに焼けているものは、七輪に筒をたてて、炭で焼いたものである。

大量生産の場合；

常滑製；10個ぐらいいっぺんに型押しでつくる。両

脇に、はみ出た粘土の筋ができる。

瀬戸製；粘土を長く伸ばして切る。脇の筋は1本。

#### (4) 錘の使用について

基本的に、大きな土錘は湖沼など、海なら波のあまりないところで、動かさない網（定置網など）に使う。波の荒いところや岩場で大きなものを使うと、すぐに折れてしまう。

また、一つの網につく錘が1種類とは限らない。例えば定置網では、入り口付近の錘は網が動かないように大きなものにし（動くとも魚が驚いて網に入らない）、中の方は比較的小さなものを使ったりする。錘が重すぎる場合は、間々を切った竹に替えて調節することもある。

#### (5) 出土土錘の同定

出土土錘のサンプルを持参し両氏に見せところ、直ちに獲物または漁法が特定された。それによると、

A類…キス

B類…サザエ・イセエビ

C類…サザエ・イセエビ、外房ではヒラメなど

D類…イセエビ

E類…イナダ・スズキ

G類…定置網

H類…定置網

とのことであった。F類はサンプルを持参しなかったため不明である。

また、球状土錘（土玉）については、「見たことがない」との答えだった。投網でも使われていないし、網の座りが良くなさそうなので海では使われないのではないか、ということだった。それでも取って錘とすれば如何なものか聞いたところ、「いけすの錘ならあり得るかもしれない」とのことであった。

#### (6) 廃棄について

基本的には錘は捨てない。錘が壊れる前に網の方が先に切れるので、切れたら網は継ぎはぎにして、錘は再利用する。定期的に錘を取り替えるといったことはしない。

#### 5. 考察

弥生時代から古墳時代に登場するとみられる管状土錘は、獲物にあわせて緻密に計算されて作られたものであった可能性が高い。土錘の大きさや形態の違いは、単なる好みや流行などによるのではなく、多分に機能に基づくものであったと考えられる。とすれば、いったんかたちが決まってしまうと、時代によって変化をとげるなどということは出来るはずもなく、従って今に至るまで同じものが使われているということになるのかもしれない。

またそれは、古代・中世を経て、そのまま現代に至るまで連綿と引き継がれるほどに、すでに一定のレベルに達していたことを示している。

但し、球状土錘（土玉）については、漁網の錘であったのか疑問な点も指摘され、例えば織物の錘などであった可能性もあるだろうが、管状土錘がどの形状もほとんど壊れないで現代まである中、弥生・古墳時代にはほぼ限られる状況なのは、特筆されよう。

時代の限定される錘としては、縄文時代の土器片錘や石錘などがある。それらは魚網の錘とされているが、管状土錘ほどには獲物を限定するようなバラエティーは認められない。このことから、当時はそれほど獲物を限定しない網漁が行われていたと推察できる。

弥生・古墳時代以降は、獲物を限定して大量に捕る網を作るようになったようであるが、そのために効率の悪い土器片錘や石錘は廃れていったのかもしれない。球状土錘（土玉）も、もし魚網の錘であるとするならば、類似した状況で廃れていったものと考えられることができる。

ところで、獲物を限定した効率的で厳密な網を作るには、獲物の研究がまず不可欠である。しかもその研究によって得られた専門的知識は、網漁が集団で行うものであるという性格からして、集団的・体系的なものとしてあったはずである。またその知識は、土錘が壊れないという事実から、実践的に常に現場で応用され続けていたものと思われる。

つまり、個人業や農業の片手間の漁師ではなく、海の幸を米と換えたり有力者などに貢いだりすることに

よって生計をたてていた専門の集団が存在していたことを、このような土錘は物語っていると言えるのではないだろうか。そのような漁撈の専門集団が、やがて漁業を通して力を得、フィールドである海の交通なども掌握するようになり、「海人族」と呼ばれる民になっていったとしても、不思議はないように思えるのである。

## 6. おわりに

以上、房総における弥生時代以降の土錘について少し考えてみたが、依然球状土錘（土玉）については位置づけがはっきりしないし、また、もっと広い視野で管状土錘を比較・検討する必要もあると思われ、それらは今後の課題とすることができる。

それにしても今回取材をしていて驚いたのは、網漁が思っていたよりはるかに繊細で微妙なものであるということだった。民俗例がそのまま遺物に適用されるかどうかはまた別問題であろうが、素人考えの浅はかさを思い知らされたような気がした。

過去においても、専門の者には素人は、全く太刀打ちできなかったのではないだろうか。海を生業とする「海人族」が、一般の人々から一目置かれて、古墳に葬られる人にひけをとらない副葬品をもって葬られたとしても、全く不思議はないと思う。それは、狩猟・採集が普通の生活であった時代には全くありえないことで、農耕中心の社会になったからこそ、漁業の専門

集団としての存在価値が重視されていったものと思われる。

もっとも、そのようなことは土錘のみから言うべきではないだろうが、土錘のあり方にその一端が現れているような気がしてならない。土錘を「新しい遺物」と軽視せずに、遺跡の中でのあり方をきちんと捉えることによって、当時の様相がより詳しくわかってくるのではないだろうか。

最後になりましたが、忙しい中わざわざ時間を割いて話を聞かせて下さったばかりでなく、現在使われている錘や浮きの数々をサンプルとして快くご提供下さった竹之内氏、黒川氏には、改めて御礼申し上げます。

## 注

- 1) 『研究員紀要』第3集 千葉県立上総博物館（1984）
- 2) 『研究連絡誌』第7・8合併号（財）千葉県文化財センター（1984）
- 3) 『干潟工業団地埋蔵文化財調査報告書－干潟町 諏訪山遺跡・十二殿遺跡・茄子台遺跡・桜井平遺跡－』（財）千葉県文化財センター（1998）
- 4) 『下総町長稲葉遺跡－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』（財）千葉県文化財センター（1994）
- 5) 全て報告書中から計測値を得て分類・集計したものであり、遺漏も多くあると思われる。また、出土していても報告書に載っていないものは、ここでは把握していない。